

明治二〇年代における「児童文学」ジャンル

― 幼少年雑誌を手がかりとして ―

一

明治二〇年代は、近代児童文学の出発期に位置づけられてきた。この時期の出版状況を概観すれば、単行本としては一八九一（明治二四）年に博文館が巖谷小波『こがね丸』をはじめとする「少年文学叢書」の刊行を開始、雑誌では八八（同二二）年の『少年園』を皮切りとして、八九（同二二）年に『日本之少年』（博文館）と『小国民』（学齢館）、九〇（同二二）年に『少年文武』（張弛館）、九一（明治二四）年に『尋常小学幼年雑誌』（博文館）が相次いで創刊されている。単行本と雑誌、それぞれの活況は、巖谷小波を主筆に迎えて九五（同二八）年に創刊された『少年世界』（博文館）の頃から、はつきりとした一つの流れを形成するに至り、小波は明治児童文学の代表的な書き手としてその地位を確立していく。小波の登場前後にあたる明治二〇年代の児童文学は、どのようなジャンルの幅や揺れを持っていたのだろうか。例えば『こがね丸』（博文館、明

酒井晶代

治二四年一月）では、児童向きの読物を表わす呼称として、小波が「少年文学」、森鷗外が「穉物語」という言葉をそれぞれ用いていた（注1）。また鳥越信は、明治元年から約二〇年間を「大人ものと子どももの」「創作と翻訳・翻案、創作と科学読み物・知識読み物、創作と人生論・修身譚、創作と民話」などの境界線が曖昧な「カオス状態」の時期と位置づけている（注2）。草創期から本格的な出発期へと移行しつつあったこの時期の児童文学は、幼少年読者にふさわしい読み物として何を選択し、何を退けたのだろうか。また、そのなかで小説や物語はどのような位置を占めたのだろうか。

流動的なこの時期の動向を見通すことは、容易ではないだろう。そこで本稿では、検討の対象を雑誌に絞ることとし、総合誌的な編集方針を採用した幼少年雑誌の先駆とされる『少年園』の創刊（明治二一年）から、より娯楽性を重んじた『少年世界』の登場（明治二八年）まで―ちようど兩

誌創刊の中間に、巖谷小波『こがね丸』の出版(明治二四年)があったこととなる—を考察の期間として、誌面構成と、小説・物語を中心とした記事内容の検討から、「児童文学」がジャンルとして編成されていく過程を追ってみたい。

なお、明治二〇年代には、東京以外の地域でも幼少年雑誌が相次いで誕生している。『東北之少年』(宮城/東北之少年社、明治二六年創刊)、『少年文学新誌』(長野/雲友舎、明治二四年創刊)、『益友』(愛知/三友会、明治二三年創刊)、『つぼみ』(兵庫/つぼみ雑誌社、明治二四年創刊)、『わらんべ』(岡山/同胞社、明治二三年創刊)、『学のひま』(愛媛/学暇会、明治二四年創刊)などはその一部であるが、これらも多くは読物を中心とした総合誌的な編集方針を採用し、小説や物語を掲載している例が多数見られる。こうした地方雑誌も視野に収めながら、創刊号を中心に明治二〇年代の状況を跡づけたい。

二

(図版一)は、明治二〇年代の幼少年雑誌に掲載された広告の一例である。『をしへ』と『小学生之友』は、前者が岡山、後者が神奈川でそれぞれ同時期に発行されていた類似誌である。おそらく情報交換の目的を兼ねていたであろう。雑誌間で互いの広告を掲載しあう例はこの時代に頻繁に見ることができ、これもその一例と言ってよい。限定されたスペースの広告という点に考慮する必要があるだろうが、具体的な著者や作品名が

をしへ 大改良

鮮明圖書挿入
一月十五日
第五十三號發行
見本五厘券四枚

●毎月一回十五日發行 ●定價一部一錢五厘
●十部前金十四錢 ●二十部前金二十六錢 ●

本誌は、廣く幼年諸子の好伴侶たらんことを期するものなり。今や其愛読者全國に遍れし。而して改良に改良を加へ、大に其面目を改めたり。この項目左の如し。

幼年諸子に裨益ある諸般の論説を掲載す
諸科の學術に關する事項を平易に説明す
種々様々の興味ある事柄を記して載す
毎號懸賞を以て探繪考へもの流麗婉美文學的趣味の多き額篇を懸賞す
毎號懸賞文學新風并に全國秀才の文を蒐む

發行所 岡山縣岡山市大字小 耳目堂
松原百四十九番邸

少年學會志 第一冊郵税共五錢 第二冊マテ既刻

文苑 文章ヲ作ルノ軌範ニシテ評點アリ社評アリ文誌アリ
一冊郵税共四錢五厘

小生徒之友 第六十四號 毎月五日一回發行
●一冊郵税共三錢郵券代用諾ス
●六冊同十七錢十二冊同三十錢
●全國少年諸君ヲテ投書アレ

發行所 横濱市上町五番 横濱文社
丁目八十二番地

(図版二) 雑誌広告の例(『健兒』第一号、明治二六年一月)

登場しないこと、その代わりに「をしへ」「學術」「雑録」「余興」「小説」「文章」(以上「をしへ」誌)、「学芸」「雑録」「笑話」「考物」(以上『小学生之友』誌)のごとく、記事の種類や誌面構成を宣伝していることに注意したい。雑誌はそれぞれの編集方針に合わせて誌面構成に工夫をこらし、誌面構成はそのまま、雑誌の個性や特徴の表現でもあった。

(表一) 明治21年～28年の幼少年雑誌・創刊号の誌面構成 (*は作成者の注記)

雑誌タイトル	発行所	創刊年月日	誌面構成 成1	誌面構成 成2	誌面構成 成3	誌面構成 成4	誌面構成 成5	誌面構成 成6	誌面構成 成7	誌面構成 成8	誌面構成 成9	誌面構成 成10	誌面構成 成11	誌面構成 成12	誌面構成 成13	誌面構成 成14	誌面構成 成15
少年園	東京 少年園	明治21年11月3日	少年園	文壇	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
まなひの友	岡山 弘立印刷物販賣	明治22年1月31日	作文(挿絵)	歌謡	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
日本之少年	東京 博文館	明治22年2月23日	論説	理学談	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
小國民	東京 学術館	明治22年1月10日	(虎の図)	(虎の話)	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
小学生之友	東京 横兵文社	明治22年10月5日	問答	作文	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
白雪赤襦	香川 香文社	明治22年11月1日	談話	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
学びの手車	東京 転輪館	明治22年11月3日	論説	祝詞	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
少年文武	東京 張池館	明治23年1月17日	少年園	少年園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
小学園	京都 小学園	明治23年1月30日	祝詞	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
わらんべ	岡山 同胞社	明治23年2月11日	小説	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
新小学	岡山 隆文館	明治23年3月8日	新小学	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
優勝劣敗	岡山 文海/福台	明治23年6月30日	文海/福台	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
少年之友	東京 益友社	明治23年9月20日	論説	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
小学会雑誌	長野 小学会	明治23年10月10日	論説	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
益友	愛知 三友会	明治23年11月10日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
時常小学 幼少年雑誌	東京 博文館	明治24年1月3日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
広野少年会雑誌	山形 広野少年会	明治24年2月20日	論説	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
つぼみ	兵庫 つぼみ雑誌社	明治24年3月1日	論説	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
美少年	岡山 少年会	明治24年3月21日	美少年	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
少年文学新誌	長野 雲友舎	明治24年3月25日	少年園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
埼玉小学雑誌	埼玉 埼玉新報社	明治24年4月15日	社説	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
学のみま	愛媛 学報会	明治24年6月24日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
文明之児童	岡山 藤州文社	明治24年9月5日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
少文林	大阪 文林会	明治25年11月5日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
学之力	埼玉 朝野新聞	明治25年11月7日	論説	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
健児	宮城 育英館	明治25年12月28日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
東北之少年	宮城 東北之少年社	明治26年3月15日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
海国子	兵庫 育英館	明治26年5月18日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
幼学生	東京 東京堂	明治26年11月1日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
少年之友	山口 海新堂編輯局	明治27年4月25日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園
少年世界	東京 博文館	明治28年1月1日	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園	園園

(表一) は、『少年園』から『少年世界』まで、すなわち明治二二年一月から二八年一月の間に創刊された幼少年雑誌のうち、創刊号が確認できたものの誌面構成を創刊順に配列したものである(注3)。物語あるいは小説的な作品の掲載が見られる欄を、網がけで表示した。後述するように、この時期の雑誌は「誌面改良」と称してしばしば誌面構成や欄名に手直しを施しており、これら創刊号のみで雑誌全体の特徴を見通すことはできない。しかし、当時における物語や小説(以下、本稿では便宜上「文学的読物」と呼ぶこととする)の位置づけはある程度伺えるであろうと考えた。以下、その特徴を順に指摘したい。

第一に、掲載の位置に着目した時、文学的読物は雑誌の中心ではなく、周辺に位置付けられるという傾向が見られる。大部分の雑誌で巻頭に置かれるのは、論説である(注4)。この論説欄に続き、例えば「學術」「学園」「学林」といった欄名で学習的な記事が掲載され、その後小説あるいは物語が置かれる、というような構成が一般的と言えるだろう。なかには『少年文武』の「附録」のように、常設欄ではない、いわば本体の外側に小説を収録する例もある。むしろ、文学的読物を一切掲載しない雑誌の存在も見逃してはならない。すでに多数の指摘があるように、明治二〇年代の雑誌が持つ啓蒙的な性格がここにも顕著に現れていると言える。そして、「おなぐさみ」と称した欄に文学的読物を置いた『幼学生』(東京堂、明治二六年)などはその典型と言えるだろうが、学習的な記事や実用

四

的な記事が優位を占めるなかで、文学的読物は副次的な扱い方をされる例が目立つ。この点で、創刊時から「小説」「史伝」といった欄を持ち、以後、号数を重ねるにつれてさらに文学的読物を充実させていった『少年世界』(博文館、明治二八年)の編集は、当時としてはかなり斬新であったと考えられる。

第二には、文学的読物を収録している場合であっても、専用欄を持たない例が多く、収録される場所が固定しない点を挙げたい。

『わらんべ』(同胞社、明治三三年)や『東北之少年』(東北之少年社、明治二六年)のように「小説」欄を設けている雑誌も皆無ではないが、大半の雑誌が「専ら小説を掲載する欄」ではなく、「小説も掲載する欄」のなかに文学的読物を収録している。(図版二)には、この曖昧さを示す例として『尋常小学幼年雑誌』(博文館、明治二四年)創刊号の一部を抜粋した。「遊びの庭」欄には漣山人の翻案「虚誕くらべ」、歴史上の逸話、感心な子どもを描いた物語といった読物とともに、考物や遊戯法の紹介が収録されている。一方、同じ号の「話しの庭」欄には加藤清正やワシントンなど偉人の逸話が掲載されており、文学的読物が複数の欄に分散している様子を確かめることができる。

先述のように、鳥越信は、明治元年から約二〇年間の児童文学を、のちのさまざまなジャンルが混交した「カオス状態」と捉えている。鳥越が言及しているのは専ら単行本の出版状況であるが、以上のような欄分けの曖昧

味さから、少なくとも雑誌の場合、明治二〇年以降もこの未分化が継続しており、児童文学がジャンルとして未確立であった状況を推察することができるだろう。

第三には、「小説」という呼称をめぐる問題を挙げたい。

(表二)には、(図版二)に登場した雑誌『をしへ』(教育書房、明治二二年「創刊年は推定」)の誌面構成の変遷を示した(注5)。(表一)と同様、文学的読物が掲載された欄を網がけで表示してある。同誌はタイトル表記や発行所の変更を経て、地方の雑誌としてはかなり長期間にわたり発行が続いた雑誌であるが、度重なる誌面改良の過程で「小説」という欄が設けられたのは、明治二五年前後の一年ほどに過ぎない。文学的読物は、「鬱はらし」のような娯楽的記事の中に位置づいた後、一度は「小説」欄として独立したものの、再び「雑録」のような諸記事のなかに紛れ込んでしまうかのように見える。

前出の(表一)においても、「小説」という欄名を掲げた雑誌は『日本之少年』『わらんべ』『東北之少年』『少年世界』のわずかに四誌のみであった。通時的にも共時的にも、「小説」という呼称の存在感は決して強いとは言えない。

各誌に掲載された文学的読物はバリエーションに富み、主題・モチ

三

フ・登場人物の設定・文体などの表現も多岐にわたる。だが「小説」欄の掲載作、あるいは作品の表題に「小説」という語を含む作品に限定すると、若干の例外は見られるものの、その大半が少年少女の日常生活、とりわけ学校生活や下宿生活を描くという共通点が見られる。やや引用が長くなるが、次にその具体例を挙げた。

小田笠造は今しも橋本栄、桃山実の両友に音訪はれて甚く打喜び満面に笑を含みて出迎へ懇ろに己が居室へ招じ茶を饗し菓子をすゝめ主客共に胸襟を開きて四方八辺の談しに時の移るを覚へざりき…水魚、莫逆、刎頸、金蘭、断金などの文字は彼等三人の交際を形容したるものならん(中略)時に小田さん

桃山が此の一言は鶴の一声、聞くより小田は素より橋本さへ雑談を中止て容を繕ろひ視線を橋本に注ぎたるは談如何にとの疑問を無言の中に表出せり。時分は宜しと桃

(表二) 『をしへ』誌面構成の変遷 (*は作成者の注記)

雑誌タイトル(号数)	発行地	発行所	発行年月日	誌面構成1	誌面構成2	誌面構成3	誌面構成4	誌面構成5	誌面構成6	誌面構成7	誌面構成8
をしへ(10)	岡山	教育書房	明治22年7月5日	*以下、欄名なし。記事中に小説あり。							
をしへ(13)	岡山	教育書房	明治22年9月10日	教の庭	学の種	心の鏡	鬱はらし	智恵くらべ	口の艶	教の花	
教(31)	岡山	教育書房	明治24年3月1日	をしへ	学術	雑筆	詞章				
をしへ(41)	岡山	教育書房	明治25年1月10日	をしへ	学術	雑録	小説	余興	文章	広告	附録
をしへ(50)	岡山	耳目堂	明治25年10月31日	をしへ	学術	雑録	余興	文章	広告		
をしへ(58)	岡山	耳目堂	明治26年6月15日	教の園	園の珠	園の葉	園の遊	園の花	広告		

(図版二) 文学的読物の掲載例 (『尋常小学 幼年雑誌』第一巻第一号、明治二四年一月)




を放ちては八方よりせめよせ、十日十夜、清正の城を圍み居り、水上までたちあさぎたれば城の内の兵隊は、みな生たる色なく、森のため指を落すものなぞありて、目もあてられぬ様なりしが、ひとり大將の清正のみは、少しも驚きたる色なく、ますく敵を防ぎたり、我が軍勢、窮山を救はんとて、三面より押しよせ、清正は城の門をひらきて、斬りていで内外より攻めよせければ、明軍もいそはたまらずなり、みなちりくにとげうせける。

學者……皆川汎園

汎園先生、四五歳のときより、書をよむことを好み、父母に催促せられて學問したること

素傑……加藤清正

昔野臣素吉、朝鮮せいはいつのもき、加藤清正のたも籠りたる取山城は明の軍勢のため、十重二十重にとりまかれたり、清正大將にて士卒をはげまし、大木大石を明軍に投げかけしめれば、みなちりくにとげうせける。明軍なほもこりたる氣色なく、またく大砲な



遊ひり度

手枕草紙


遊ビの法

(一) つ、す、と、を、(二) コルクを抜かすに瓶中のビールを飲む法があるなら飲へて頂戴、西洋数字一字で之を二に割れば二字になるがどいつて其数は一字の時より少なくなる、(三) 字があり升何の字でしやう、(四) 全じく西洋数字で之を倒さすれば初よりは三つ多くなる字があり何でしやう、(五) 全

其(一) 虚誕くらへ

或る田舎に大名と百姓とが、隣同士に住で居ました、そして其大名は非常に高慢な人で、世界中に自分よりあらい者はないやうな氣で、何時も他へ出る時は、四匹立の立派な馬車に乗って、大道狭して押し行きます。それを彼の百姓は見、小面憎く思ひまして、どうか彼奴の高慢な鼻を挫いてやりたいものと、いろく工風した末、忽ち二策を考え、ある日彼の大名が、例の通り馬車に乗て出かけるのを見て、自分も其の後から、荷車の上へ欄山を積んで、それへ家に飼て居る六匹の馬を繋らすつけ、その先へ、馬丁を五六人行列さし

遊ひり度



遊 全

山は温顔に一層の奥床しさを添へて再び口を開き

(桃) 少し貴君に御尋申さねばならん事があります。全体貴君の将来の御目的は何ですか……ト計り申すと何か疎忽な様ですが実は今日学校で修身科の時間に先生から目的のお話を承まりましたが、凡て人は早く前途の目的を定めて勉強せねば不可そうです、ソコデ貴君に……(小) ソリヤ御信切に……私も不肖ながら目的は定めて居ます。私の家は代々百姓ですが私も之を継いで農業に身を入れる積りです即ち今少し当地で勉強して行末は北海道へ出掛けて骨身を砕いて開墾に従事する目的です(中略) 大概の書生は実業といへば一文の価値も無い様に排斥して仕舞ますが私の考では実業も満更……イヤ将来日本は実業の国として誇るべき土地ぢやとは或る先生から嘗て聞た事があります……ソコデ私は徹頭徹尾実業を賛成する訳です

(靖洲居士「教育小説 面白誌(第四回)」Ⅱ『をしへ』第二三号、明治二二年九月)

恋と欲とが世になくば天より稟けし善良の貴き性を故らに曲げて不良の道に入る愚かの人のあるべきや欲と恋とに身を棄し世の成行ぞ憐れなる恋よ恋よ汝は我身の讎なるぞ欲よ欲よ汝は我身の敵なるぞ実に憎むべきはこひぞかし実に恐るべきは欲ぞかし

然なきだに痴情の赤繩に絆されて憂に沈む柳田は今松山の一言に深くも「嬢を思ひ起し調ぶる書さへ心につかず文かく手さへ後や先き写

す穂先はいつしかにSと」の二字となる

(露の舎「航路の夢(第二回)」Ⅱ『智恵の海』第一号、明治二四年六月)

前者の「教育小説 面白誌」(注6)は、小田、橋本、桃山の三少年の学校生活を描いた作品である。一四歳の三人は共に幻燈会に出かけたり、引用部のように将来の展望を語り合ったりする。複数の人物を交流させて一応は小説の体裁を整えているが、作中で展開する少年たちのやりとりは「修身科の時間」に聞いた教師の訓話の再現に過ぎない。表題に「教育小説」と銘打たれているように、全編を通して教育の価値を説いた作品と言つてよいだろう。

対する「航路の夢」(注7)は、「東洋の閣龍」の異名を持つ柳田という青年の冒険譚である。彼はスペインの領地であるルソン島に寄港し、かつてこの地の日本人町に居住した同郷人に思いをはせる。ナシヨナリズムの色合いが濃い作品であるが、出航前の日常生活の場面には、引用部のような恋愛のエピソードも登場する。掲載誌である『智恵の海』(秀文館、明治二四年「創刊年は推定」)には尋常小学校や高等小学校生徒の投稿作文が多数掲載されており、他の記事内容からも『をしへ』と同じく、主要読者を幼年・少年層に置いていたことは間違いない。このように、幼少年読者に対する明らかな教化意識が感じられる作品と、反対に幼少年読者への意識が見えにくい大人びた恋愛小説とが、類似誌のなかで出現している様子は、そのまま、当時の幼少年雑誌における小説観の揺れや混乱を端的

に物語っていると考えられよう(注8)。

多様な作品が登場する一方で、論説や批評の欄では小説がどのように論じられたのだろうか(注9)。作品と同様に、具体例を挙げながら確認したい。

ルツケルト少年の読書を誡めて曰く『汝は猶ほ蠅の如く、毒をも亦砂糖と俱に舐るものなり』と、蓋し名言と云ふべし。今や我邦の少年が群がる所の書冊の砂糖は、実に少きにあらず。(中略) 語を換へて之れを言へば、甘き砂糖なきにはあらず、然れども蠅を殺すの毒を混するもの多きなり。余輩は少年諸君が之れを舐るの危険を知るなり、殊にある種類の小説の如きは絶えて高尚なる精神なく、清潔なる感情なく、野卑みだち淫猥みだらの媒介たらずば、少年の教育に蛇蝎視すべき軽薄と狡猾の誘導たるものにて、実に是れ少年の爲めに罌粟子液けしこのよに勝るの毒たり、思はざる可からず撰まざる可からず。

(無署名「少年書類に就て」II『少年園』第九号、明治二二年二月)

夫レ良薬モ分量ヲ誤レハ毒薬ト変ス之ト同シク凡テ事物用テ非常ノ大良結果ヲ收穫ス可キモノハ一步ヲ誤フ用法宜シキヲ失ヘハ非常ノ大害ヲ醸スモノナリ稗史小説亦此ノ如ク利用法宜シキニ適ヘハ非常ナル良結果ヲ收穫スル其右ニ出ルモノナシ(中略) 思フニ稗史小説ニ於テ其

主公ニシテ才徳兼備ノ人傑ナランカ読者己ヲ之ニ比セントスル憤発スルモノナレハナリ其証ハ余輩ガ稗史小説ニ於テ英傑トシ偉人ト称スルモノノ事蹟ヲ読ミ心自ラ此輩ニ比セント欲スルノ念ヲ生ズルニ徴シテ争フ可カラサルノ事実ナレハナリ然リト雖モ一利害ハ免レサル所ニシテ善悪邪正ヲ弁セサル童児モ微悪ノ小説ヨリ悪事ヲナスノ方法ヲ知ル至ルヤモ期ス可カラス故ニ小説家宜シク猛省セサル可カラズト雖モ読者亦須ク善良ノ者ヲ撰択セサル可カラス

(錦水漁夫「稗史小説果シテ有害無益ナル乎」II『周陽少年会誌』第七号、明治二三年六月)

小説ヲ脳髓ノ軟弱ナル無邪気ナル罪ナキ天真爛漫タル小学会ノ会員杯ニ読マスルハ大ナル間違ヒデハ御座ラヌカ立志編伝記ノ如キモノヲコン載スル可ケレ何ヲ苦ンデ父母兄弟団欒ノ間ニ読ムヲ憚ル如キ淫猥ナル小車ヲ載セテ人ノ子ヲ害スヲ要センヤ

(幽明子「都ノ小車ヲ讀ム」II『小学会雑誌』第五号、明治二四年二月)

小説讀ムベキ乎、讀ム可クシテ讀ム可カラザル也。然ラバ如何ナルモノヲ以テ讀ムベシトナス乎、英雄豪傑ノ伝記ノ如キ之レナリ。如何ナルモノヲ以テ讀ムベカラズトナス乎、稗史ノ如キ之レナリ。(中略) 稗史ハ多ク淫猥ニ涉リ、痴話ニ流レ、読者ヲシテ飽カシメズ、厭ハシメズ、喜バシメ、笑ハシメ、泣カシメ、樂シマシメ、精神恍惚トシテ茫然小説

中ノ人タランコトヲ希望シテ止マザルニ至ル。其及ボス所ノ害実ニ云フベカラズ。(中略) 余輩少年ハ勉メテ稗史ノ類ヲ斥ケ、史伝小説ヲ讀ミテ、忠臣孝子ノ偉業ヲ欣慕シ、忍耐勤勉ノ志氣ヲ發作シ、元氣ヲ養ヒ、智徳ヲ植ヘ、以テ天下有用ノ材ヲ成サンコトヲ。

(吉川兼吉「小説ニ就テ」Ⅱ『少年世界』第二巻第七号、明治二七年一月)(注10)

小説を「毒」に喩えた「少年書類に就て」(『少年園』)を筆頭として、条件付きで容認する「稗史小説果シテ有害無益ナル乎」(『周陽少年会誌』)や「小説ニ就テ」(『少年世界』)も含め、いずれの論もかなりセンセーショナルな言葉を用いて、小説の害を強調していることが分かる。さらに「都ノ小車ヲ讀ム」(『小学会雑誌』)では、具体的な作品(『都の小車』)に則った小説批判が展開されている。残念ながら『小学会雑誌』のバックナンバーが揃わないため、現時点では連載中途の確認にとどまるが、「都の小車」は、地方から上京した少年を主人公とした立身出世譚のようだ。連載第一回では、主人公が同郷の友人たちと上野に遊びに出かけ、娘に見初められる場面が描かれる。娘は主人公に一目ぼれをし、恋わずらいで寝込んでしまう。「都ノ小車ヲ讀ム」では、こうした恋愛をめぐる場面が「淫猥」であり『小学会雑誌』の読者にはふさわしくないと厳しく非難されている。

引用中には「少年」「童児」「天真爛漫」といった言葉が登場しており、

年若い読者への強い配慮を見て取ることができる。日常生活に取材した作品を執筆しようとした時、多くの書き手が参照したのは、何よりもまず成人文学だっただろう。そして、大人向けの小説を模倣するようにして書きはじめられた作品の中から、次第に恋愛のようなモチーフが顕在化し、幼年読者にふさわしい主題やモチーフが模索されるなかで、「小説」という言葉は次第に敬遠され、年長者Ⅱ大人を対象としたジャンルとして、幼年雑誌の外側へと一度、押し出されていったように見える。大胆に仮説を述べるとすれば、明治二〇年代に、「大人向け小説」の延長上で、幼年の日常生活を描くジャンルとして萌芽しかけた「小説」は、雑誌が幼年向きに特化していくなかで、ジャンルとして定着の場を得ることができないまま、(表二)『をしへ』の例のように「雑録」のような欄に埋没し、見えにくくなってしまったと言えるのではないだろうか。

四

以上、雑誌の誌面構成といくつかの具体例から、出発期の児童文学の様子を検討してきたが、これらの状況を踏まえた時、博文館の仕事、そして巖谷小波という書き手の新しさや特異性が改めて浮上するよう思う。

一 此書題して「少年文学」と云へるは、少年用文学との意味にて、独逸語の *Jugendschrift* (juvenile literature) より来れるなれど、我邦に適當の熟語なければ、仮に斯くは名付けつ。鷗外兄が所謂の穉物語も、同じ心な

るべしと思ふ。

(中略)

一 ちと手前味噌に似たれど、斯る種の物語現代の文学界には、先づ稀有のものなるべく、威張て云へば一の新現象なり。されば大方の詞友諸君、縦令吾が作の取るに足らずとも、此後諸先輩の続々討て出で賜ふなれば、兎角此の少年文学と云ふものに就て、充分論らひ賜ひてよト、是も予め願ふて置く。

一 詞友吾を目して文壇の少年家と云ふ、そはわがものしたる小説の、多く少年を主人公にしたればなるべし。さるに此度又少年文学の前坐を務む、思へば争われぬものなりかし。

右は、広く知られた『こがね丸』の「凡例」である。ここで小波は幼少年を讀者とした読物の呼称として「少年文学」という言葉を用いている(注11)。管見の限り、明治二四年当時の雑誌で、幼少年向きフィクションを指す言葉としてこの語を用いた例は見当たらない(注12)。「小説」の有害性を憂える同時代の人々にとつて「少年文学」という言葉は、新たな幼少年向きジャンルの誕生を告げる言葉として、新鮮に受けとめられたと考えられる。

日常生活を描いた「小説」とは異なり、偉人の生涯や逸話を紹介する「伝記」や「歴史譚」でもない。「小話」にも通じる洒落や地口の面白さを持ちながら、一方で「修身譚」のような教訓性も盛り込む。『こがね丸』の

内容もまた、「小説」に象徴される従来の幼少年向きフィクションの否定的な側面を周到に回避し、肯定的な特徴を巧みに組み合わせたものであつたとと言えるだろう。文語体の文体や仇討ちというモチーフから前近代性を指摘されることも多い『こがね丸』であるが、位置づけが定まらず、いまだジャンルとして前景化していなかつた児童文学を、雑誌の中でさまざまに欄に拡散しがちであつた雑多な要素を取捨選択する形で、ひとまずは「少年文学」という呼称のもとに顕在化させたという点で、「児童文学」ジャンルの誕生に大きく寄与したことは間違いないだろう。

五

今後の課題は数多い。最後にそのいくつかに触れておきたい。

第一に、明治以前の文芸ジャンルとの接続と断絶を検討すること、第二には同時代の小説をはじめとする大人向けの文学ジャンルとの接続と断絶を探ること、第三には雑誌以外の読物、とりわけ同時代の教科書との比較検討を進めることが必要になると考えている。むろん、この時代に用いられた「幼年」あるいは「少年」の語がどのような対象を指すかという子ども観の問題や、読物としての文学と並存していたであろう作文の手本や文範としての文学といった文学観をめぐる状況もおさえておく必要があるだろう。

緒についたばかりの研究である。今後も雑誌の検討を中心に据えながら、この課題に取り組んでいきたい。

〔注〕

- (1) 本稿では詳述しないが、この二つの呼称もまた、同一のものを指し示していたとは言いがたい。なお、この点に関してはすでに刊行直後に同様の指摘が確認できる(有髯釋児「こがねまる」Ⅱ『国民之友』一〇七号、明治二十四年一月)。
- (2) 鳥越信「日本近代児童文学史の起点」『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、二〇〇一年)
- (3) 表に挙げた雑誌は、その多くを、国立国会図書館、東京大学法学部付属明治新聞雑誌文庫、大阪国際児童文学館で調査した。その他、各地の公共図書館や個人蔵の資料も一部含まれる。
- (4) 今回検討対象とした創刊号の場合は、巻頭に「発刊の辞」や「祝詞」に相当する文章が掲げられることが多いが、それらの欄も採った上で(表二)を作成した。
- (5) 『をしへ』は創刊号未入手のため、(表二)には掲載できなかった。
- (6) 現時点で確認できているのは、連載第一回『をしへ』第一〇号、明治二年七月から第五回(第一四号、同年一〇月)までである。
- (7) 現時点で確認できているのは、連載第二回『智慧の海』第一号、明治二四年六月のみである。
- (8) 幼年雑誌における「小説」観の揺れや混乱がうかがえる例として、このほか、饗庭篁村「紅葉」『少年園』第一号〜第八号、明治二二年十一月〜二二年二月)がある。この作品は恋愛を扱ったこと

が一因となり、連載が中断されている。

- (9) この時期の児童文学評論の全体像については、向川幹雄「明治初期の児童文学評論」『言語表現研究』第三号、一九八五年)を参照のこと。
- (10) 『少年世界』(山口/少年世界社)は、『少年学窓之友』の改題誌で、明治二七年創刊「推定」。創刊号未入手のため、(表二)には掲載できなかった。博文館の同名雑誌との違いに注意されたい。
- (11) ただし、「少年文学」が小波による命名か、あるいは博文館が叢書名として考案した名称かに関しては、別途検討の必要がある。
- (12) 確認できた唯一の例外として、同年三月に創刊された雑誌『少年文学新誌』(長野/雲友舎)がある。この雑誌は和歌や韻文などの文章創作を主とした雑誌であり、「読む文学」ではなく「書く文学」として「少年文学」の語を用いていると推測される。

〔付記〕

- ・本稿は愛知淑徳大学研究助成(平成一六〜一七年度「特定課題研究」)による成果の一部であり、第四四回日本児童文学学会研究大会(二〇〇五年一〇月三〇日、於同志社大学)での口頭発表をもとに、加筆・訂正を施した。
- ・引用部の旧字体は新字体に適宜改め、ルビや圏点も多くを省略した。